

モーム文学の特徴(1)

田 中 正 志

(一)

William Somerset Maugham (1874~1965) は91才で世を去るまでに詩を除いて、文学の四つの領域、つまり、小説、劇、短篇小説、紀行文に多くの作品を世に残している。そして、彼ほど世界中に多くの読者をもつ作家は少ないであろう。

自然主義の処女作「ラムベスのライザ」や彼の小説技法上の頂点で、さらに、文壇の裏面史的な興味を示す「お菓子とビール」またモーム自身の自伝的小説と言われている「人間の絆」絶対美の探求「月と六ペンス」、汎神の発見「剃刀の刃」というモームの代表的な長篇小説ではモーム自身が一人称、または、三人称で作品の中に姿をみせている四部作に、彼の最後の作品「カタリーナ」をみると、モーム文学の概要をつかむことができる。しかし、モームのすべてを理解するにはその他短篇を含めてすべてを吟味する必要があることは言を待たない。

モームの魅力はシニシズム、あるいはアイロニとユーモアをまじえたりアリズムにあることは万人の認めるところであろう。

リアリズムについてはモームによると、本来、「相対的」なもので、現実をあるがままに見つめることであって、その現実をポジティブでもなければ、ネガティブに見るのでもない。では一体、モームの文学はいかなるものであったのか考察してみたい。

(二)

モームは91才でこの世を去る寸前まで、月に約100通のファンレターが世界中から届いた世界的な人気作家であったわけだが、イギリスの文壇からは高い評価を受けていなかった。それどころかモームに対して冷淡であったという方が妥当であるかもしれない。

モームに対して、20代は粗暴、30代は軽薄、40代は皮肉的、50代は有能、60代は浅薄と批評家に言われていることを嘆いたモームに彼らは無関心という立場をとっている。

モームについての評言は無類の story-teller, 不可知論者, 世紀末唯美主義的傾向, 善と悪の追求など様々であるが、モーム文学の特質を捉えるものであるが、モーム文学を包括的に解釈する研究家は少いと R. L. Calder は主張し、彼の著書 *W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom* の中で Calder 自身はそれを individual freedom の追求と考え、逃避型の自由探求者をモーム文学の登場人物のなかに見ている。

The Razor's Edge (1994) という彼の晩年の作品に示されたモームの古代インド神秘思想への関心も、彼の母校 *The King's School* にある *Maugham Library* の中の蔵書から見ることができると Calder は言っている。

モーム文学のテーマは「自由の探求」であることは *Of Human Bondage* (1915), *The Moon and Sixpence* (1919), *Cakes and Ale* (1930), *Theatre* (1937), *The Razor's Edge* (1944) 等の代表的を読めば「精神の自由」がモームの主たる関心事だということが理解できる。

Of Human Bondage は Philip Carey が Mildred という女性に痛々しいほど、あるいは醜いほどに執着していたが自分の愛がただ情念の作り出す幻影を追求したにすぎず、この小説のクライマックスとして人生無意義という人生観を一枚のペルシャ絨毯から学ぶ。モームは Cronshaw の謎を解き、大いに精神の自由を得る。

つまり、人生にはなんら意味はなく、ペルシャ絨毯のでたらめな図案のように、特別に意味などありはしない。人間生れようと生まれまいと、生きていよ

うと死のうと、とるに足らぬことだ。即ち、人生は無意義で死も大したことではない。そういうことがわかるといかなる運命も恐れるに足らず、織工が自分の審美的快感を満足させるだけに精巧な図案を織るように、人も自分の喜びのために、人生の複雑な事実から好みの意匠を織ればよいという人生観を得て人間は自分の一生を生きていけるという勇気を与えられるのであるが一種虚無的な人生観に到着するのでモームのこの作品は「暗い」、「不健全」、「病的な」という批評を受けるが主人公 Philip にとって、つまりモームにとっては精神の解放というか、自由というか、そういう歓喜の叫びであると解釈することが正しいのではないだろうか。

(三)

モームは知識階級も一般大衆も含めた広範な層を楽しませる面白い story を提供するのが小説家の任務というのが持論である。

文章は lucidity と simplicity で story の展開は論理的で、さらに、文学はその固有の領域を守るべきで、社会問題、政治、宗教、哲学などを持ちこむのは邪道だと主張している。

この立場から考えてみると、第一次大戦などは小説の背景としてスパイス程度にしかすぎなかった。The Razor's Edge では神秘主義が扱われているがこれも第二次大戦後の時代の好みに従ったものである。

今世紀文学におけるモームの占める地位として考える時に読者層を見てみると長期にわたって多数の読者の支持を受けつづけてきた事実は否定できない。一般大衆だけでなく、知識人のあいだでもかなり人気を博してきたわけで、もしモームが現代という時代の雰囲気と無縁な作家なら、そのようなことは可能ではない。

前述のモームの人生観は現代という混乱期に生きる大多数の人間が折にふれて感じる実感ではなかろうか。このような考え方が一般の読者層にまで浸透することは希有なことである。尚、モームの人間観がやや表面的な不可知論にすぎぬにしても、現代人の意識の深いところまで入り、日常的な体験にまでなっ

ているからこそ、容易に受け入れられているのであろう。

現代の知識人には知的な娯楽を与え、一般大衆に文学の楽しみを教えたという点で、加えて自分の信念通りの小説を貫いたしぶとさの面でモームは現代文学の一隅を輝らすだけの仕事を達成していると見たい。

(四)

モームの宗教観について少し言及してみよう。在仏英国大使館の顧問弁護士を父としてパリで生まれ、幼くして、両親を亡くし、牧師である叔父夫妻にひきとられ、共に暮らしその怠惰で偽善的生活を観察し、幼時に培われたキリスト教への不信はモームにとって大いなるショックであった。

それでも、幼きモームは当初まだ熱心なキリスト教信者であった。そのモームの信仰を決定的に懐疑的方向へ導いたのは生来の言語障害を取り除いてもらおうと神に願いをかけた一件である。「もし汝ら信仰ありて疑わずば、この山に『移りて海に入れ』というとも、また成るべし。」という聖句を読んで、山を動かすことに比べれば、モームの言語障害である吃りをなおすこと位は簡単なことだ、と幼きモームは思いこんだのである。しかし、満願の朝、目ざめて、依然として吃る自分を見いだした時、愕然とする。朝食の席で叔父に説明を求める。「それは、つまり、信仰が足りないということだ」というのが叔父の答えであった。であれば十分な信仰というものは結局、誰ももち得ないものだという結論を下す。この時のショックは大きなものであった。モームが彼なりの無神論を確立したのは17才の時、ドイツのハイデルベルクに遊学した時代である。これまで英国国教が唯一の真正な宗教だと教えこまれ、天国は国教徒にのみ与えられる特権であり、非国教徒たちはことごとく火あぶりの刑に処せられると叔父の牧師に聞かされてきた。しかし南ドイツではカトリックが盛んで、教会に集まる人はいつも満員で全く敬虔そのものであった。ドイツ人たちがカトリックを信じている確かさは、イギリス人の多くが英国国教を信じている確かさと少しも変わりなかった。それでは、回教徒も仏教徒もそれぞれの宗教に対する確信は同じであるにきまっていた。どこで生まれるかによって、その人

の死後の運命が定まるとすればこんな不合理な話はない。そして若きモームの思考は「なぜ人間は神を信じなければならぬか」と飛躍していく。

実際にはモームの表面的に神を否定したこの時から彼の求道の旅路はスタートするのである。どんなに神を否定しても、心の奥底にひそむものを消すことができず、この内面の恐れがモームに人生の意義、宗教について考えさせられる。前述の *Of Human Bondage* は彼の求道の記録とも言うことができよう。この小説の主題は Philip の Mildred なる女性に対する自虐的恋愛にあるのではなく主人公 Philip の悟りに至る過程にある。モームは人生の意味を真剣に考えた作家の一人と言えよう。無神論者モームの方が自称クリスチャンより、より宗教的だったという矛盾めいたことも言える。

短編小説 *Rain* をふくめて幾つかの作品には、聖職者に対する痛烈な皮肉がある。しかし、モームは神を信じるのをやめた時、宗教を放棄したのではない。それどころか、特定の宗派を越えて、宗教の本質の探求を開始したのである。

モームの理想神の追求は「五彩のペール」、「カタリーナ」短編「裁きの座」の作品に現われている。前述の Philip の精神の自由、つまり、悟りは東洋思想の「無」に近いことはモームの並々にならぬ研究をうかがい知ることができる。

(五)

モームの家系については甥の Robin Maugham の *Somerset and all the Maughams* (1977) で詳細に知ることができる。

優秀な血筋で著名人を多く輩出していることは注目し得る。もともと、ケルトの出身で父方の祖先はアイルランドから移住し、ウェストモアランドの高原で農業を営んでいた。

祖父 Robert Armand は有名な弁護士で、著書も多く、1825年には法律協会を設立し、初代会長に就任。8人の子供のうち、長男の Robert Ormond がモームの父で有能な弁護士でパリに住み、法律事務所を開き、英国大使館の顧問弁護士でもあった。文学・芸術に特に興味をもち、旅行も大好きであった。

モーム自身の旅行好きは、多分、父親の遺伝であろうと言われている。

母方の系図によると、祖先はエドワード英国王一世とカスティリアのエレオノールにさかのぼる。母方のモームの祖父は陸軍少佐で1857年、インドの暴動で殺されたが彼の妻、即ち、モームの祖母は二人の娘をつれてパリに住み、筆がたち、小説を書いて娘たちを養育した。その娘の一人が Robert Ormond と結婚しモームを生む。彼女の名は Edith Mary といい、美人であった。

醜男の40才であるモームの父が20才も年下の美女と結婚したので、当時のパリでは「美女と野獣」と評判になったとモーム自身が言っているので確かなことであろう。

子供は男ばかり6人生まれ、モームはその末子であった。しかし、モームが8才で母親を、10才で父を亡くす。

モームの兄5人のうち、二人は早死、3人は法律家になり、長兄 Charles は父の法律事務所を継ぎ、次兄 Frederick は最高裁判所長に任ぜられ、爵位を賜っている。三兄 Harry は36才で自殺。次兄 Frederick Maugham の長男が Robin Maugham である。

(六)

モームの人間本性の不可解性を執拗なまでに追求してきた人間探求と心の遍歴は多様性を認めることにあった。

モームの作品の中には彼自身の人生観が貫流し、一種独特の味を与えている。人間同志が何となく疎外感をもっている現代において、一般大衆ばかりでなく、知識階級にまで魅了しているのは本質的にはモームの人生観にあると考えられる。

彼の人生観をもちつつ、小説の目的は読者に教えるのではなく楽しませることであって、小説はすべて現実の逃避であると幾度となく主張し、自分は「物語の語り手」と称しているだけあって、明快、簡潔な口語体の文章に彼独特の皮肉を織り交ぜ、読者をぐいぐいとひきつける興味深い story を展開している。Brophy はモームのことを「書く人というよりもむしろ語り手」と評している

が全く当を得ていると思う。

モームの文体は一般に短く、and, but という接続詞で結ばれた単文が多く、複文になることは少く、言葉づかいそのものも口語的である。純文学作家のうちで口語的表現を物語体の本質的要素にしている数少ない作家でもある。モームのこのような平易な口語体の文章を容易に書けるようになったのではなく、大変な努力の結果であって、モーム自身が natural writer (生まれながらの作家)ではなく、made writer (作られた作家)と認めているところです。

モームの父親の仕事の関係でパリで生まれ、幼年時代をフランス語の環境で育ったモームにとって英語は外国語のようなもので英語で書くことは大変な苦勞であった。

The Summing Up の中で文章の書きかたを修業しようと決心している。

Simplicity is not such an obvious merit as lucidity. I have aimed at it because I have no gift for richness. Within limits I admire richness in others, though I find it difficult to digest in quantity. I can read one page of Ruskin with delight, but twenty only with weariness. The rolling period, the stately epithet, the noun rich in poetic associations, the subordinate clauses that give the sentence weight and magnificence, the grandeur like that of wave following wave in the open sea; there is no doubt that in all this there is something inspiring. Words thus strung together fall on the ear like music. The appeal is sensuous rather than intellectual, and the beauty of the sound leads you easily to conclude that you need not bother about the meaning. But words are tyrannical things, they exist for their meanings, and if you will not pay attention to these, you cannot pay attention at all. Your mind wanders. This kind of writing demands a subject that will suit it. It is surely out of place to write in the grand style of inconsiderable things. No one wrote in this manner with greater suc-

cess than Sir Thomas Browne, but even he did not always escape this pitfall. In the last chapter of *Hydriotaphia* the matter, which is the destiny of man, wonderfully fits the baroque splendour of the language, and here the Norwich doctor produced a piece of prose that has never been surpassed in our literature; but when he describes the finding of his urns in the same splendid manner the effect (at least to my taste) is less happy. When a modern writer is grandiloquent to tell you whether or no a little trollop shall hop into bed with a commonplace young man you are right to be disgusted.¹⁾

従って、モームは明快さ (lucidity), 簡潔さ (simplicity), 音調のよさ (euphony) の三つを自分の文章の目標にすることにした。

(七)

簡潔な筆で論理的に一貫した明晰な人間像を描き出し、また *The Summing Up* で矛盾なき自画像を描いたモームであるにもかかわらず、作品相互に思想のくいちがいがあり、自画像と彼の性格には矛盾があり、複雑な人間であったことは確かである。このことは近親者である Robin できえ、ウィリー (モームのこと) をよく理解できなかつたと告白していることから明白である。

モームが小説のなかで扱う題材は人間——人間性及び性格である。環境は具体的であるがこれはいわば主役ではなく人間性や性格を浮き彫りにし明らかにするための背景や手段である。

モームの作品には真、美、善という要素が見られる。一方、作家としての思想的発展は一進一退しながらも *Of Human Bondage* におけると同様、真美善の順序に従っているように思われる。即ち、人間存在の探求と美的なものの見方から、人間はいかに生きるべきか、何が大切なものであるかというように発展している。

1) *The Summing Up* (Heinemann), pp.32-33.

処女作 *Liza of Lambeth* (1897) はリアリズムの典型で *Liza* という女性が
負わされた人間の業であり、貧民街の *Liza* が性の本能に駆り立てられ、妻子
ある中年の男との情事に溺れ、破滅への道を進んでいく姿がたんとと描写さ
れ、一抹の美を感じさせる。(to be continued)

<Bibliography>

- Maugham, W. S.; *The Razor's Edge*, Heinemann, 1974.
The Partial View, Heinemann, 1954.
The Summing Up, Heinemann, 1938.
Brophy John; *Somerset Maugham*, Longmans, Green London, 1952.
Calder, R. L.; *W. S. Maugham and The Quest for Freedom*, Heinemann 1972.
Maugham, Robin; *Somerset and All the Maughams*, Greenwood Press Publishers, 1977.
Jonas Klaus W.; *The World of Somerset Maugham*, Greenwood Press Publishers, 1972.
Maugham Ted; *Somerset Maugham*. Jonatham Cape, 1980.
Maugham Ted; *Maugham A Biography*, Simon and Schuster New York. 1980.
Pfeiffer, Karl G.; *W. Somerset Maugham: A candid Portrait* London: Gollancz, 1959.
Maugham, Robin; *Conversation with Willie, Recollection of W. Somerset Maugham* New York, Simon and Schuster, 1978.
Burt. Forrest D.; *W. Somerset Maugham*, Twayne Publisher, Boston 1985.
Curtis, Anthony; *Somerset Maugham (Writers & their Work)* Windsor, Berkshire, England, 1982.
Somerset Maugham, Macmillan Publishing Co, Inc. New York. 1977.
Maugham, W. S.: *Of Human Bondage*, Heinemann.
Maugham, W. S.: *The Complete Short stories*, Heinemann.
Maugham, W. S.: *The Collected Plays*, Heinemann.